



東京都小笠原
亜熱帯農業センター(父島)
Tel.04998-2-2104
Fax.04998-2-2565
営農研修所 (母島)
Tel.04998-3-2129
Fax.04998-3-2006
畜産指導所 (母島)
Tel.04998-3-2275
Fax.04998-3-2276

～ 新年を迎えて ～

明けましておめでとうございます。

世界自然遺産に登録されて早1年半が経過しました。この間、遺産効果もあり、小笠原を訪れる観光客は増加しており、多くの来島者が「小笠原ならではのもの」を求めようになりました。一方で、世界自然遺産の登録により、今まで以上に自然環境の保全に配慮した農業振興が求められるようになっていきます。

こうした状況を踏まえて、現在、農業センターでは、亜熱帯気候という小笠原の特性に適した熱帯果樹の安定生産と周年販売を目指した試験研究に取り組んでいます。また、小笠原の固有植物の生産技術開発やオガサワラオオコウモリの農業被害対策、天然記念物の陸産貝類の保護と両立できるアフリカマイマイの防除法の開発等も行っております。さらに、農家巡回や講習会の開催等を通じて経営改善指導を行うとともに、家畜飼養技術の普及等にも取り組んでいます。

このような試験研究や経営指導は農業生産者の皆様のご理解とご協力の上に成り立っており、村の農業振興や生産性の向上に寄与してこそ意義のあるものとなります。本年

も、皆様のご意見やご要望をお聞きしながら精力的な取組を行い、成果の還元に努めていきたいと思っております。皆様におかれましても、お気軽に当センターに足を運んでいただき、センターが保有する農業に関するさまざまな情報やノウハウをご活用いただければと思います。

さて、昨年3月に都は、東京農業を取り巻く環境の変化に対応するため、今後の農業施策の方向性を示す「東京農業振興プラン」を10年ぶりに改訂しました。本プランでは、目指すべき東京農業の姿を「都民生活に密着し未来に向け発展する産業」としております。

小笠原においても、農業は住民の食を支えるだけでなく、観光客に対して特産品を提供し、小笠原の魅力を伝えるなど、村に活気と豊かさをもたらす重要な産業となっています。遺産登録がもたらした観光客数の増加や小笠原の認知度向上を農業振興の絶好のチャンスと捉えて、今後、小笠原の農業を魅力ある産業として発展させていくために職員一同尽力して参ります。引き続き、皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

＜産業課長 川口＞

研究成果報告会のお知らせ

下記の日程で平成24年度研究成果報告会を行います。皆様、是非ご参加下さい。

父島～2月14日(木) 14:00より圃場見学会(農業センター圃場にて)

16:30より成果報告会(農協直売所2階にて)

母島～2月17日(日) 18:30より成果報告会(農協母島店2階にて)

～ アフリカマイマイに使える環境にやさしい 新薬剤「スラゴ」が適用拡大されました！ ～

現在、アフリカマイマイなどの防除には、「ナメクリン」が使われていますが、主成分のメタアルデヒドはカタツムリ類・ナメクシ類に対する誘引性が強いため、特に母島においては固有の陸産貝類（カタマイマイ類など）も誘殺されてしまう可能性があります。亜熱帯農業センターとしては、「世界自然遺産登録地にふさわしいアフリカマイマイの防除」を目指すためにもこのような点に配慮する必要があると考えています。

昨年度に適用拡大試験を実施した「スラゴ」が、2012年9月26日付でアフリカマイマイにも登録（適用拡大）されました。本剤は従来のメタアルデヒド剤とは異なる有効成分（燐酸第二鉄）ですが、それと同等か、それ以上の効果が確認されています（図1～3、処理9日後「メタ」はメタアルデヒド剤）。

従来のメタアルデヒド剤の効果が接触や摂食により麻痺して動けなくなり死亡するのに対し、本剤は速やかな致死作用はありませんが（図4）、摂食により消化器に異常をきたし、食欲が無くなることで作物への被害が減少します。また、主に枯葉を食べているカタマイマイ類が誘引されづらい可能性があります。

登録内容は、「使用量：3～5 g/m²、使用方法：アフリカマイマイの発生あるいは加害を受けた場所または株元に配置、適用場所：温室・ハウス・圃場・花壇」です。

なお、本剤は有機農産物のJAS適合農薬として認可されています。メタアルデヒド剤も指定されていますが、「捕虫器に使用する場合に限る」と指定があり、通常の散布は認められておりません。 <大林>

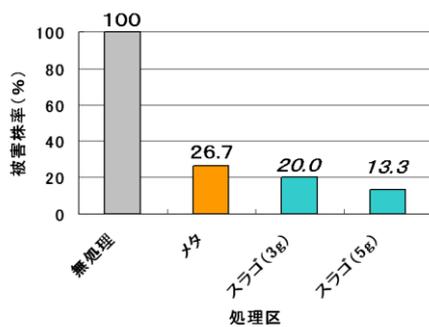


図1 被害株率の比較

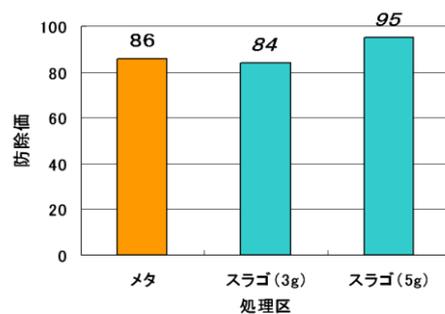


図3 防除値(処理区と無処理区の被害度から算出)の比較

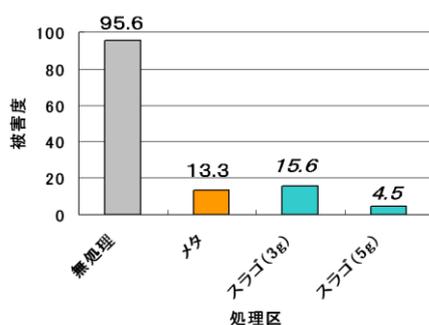


図2 被害度(どのくらい被害を受けたか)の比較

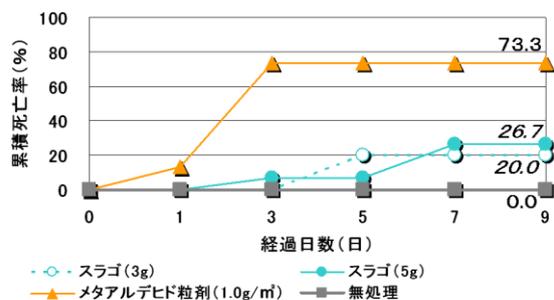


図4 死亡率の推移

～ アテモヤをつくってみませんか？ ～

1. アテモヤとは

アテモヤ (*A.squamosa* Linn. × *A.cherimola* Mill.) はバンレイシ科バンレイシ属の植物で、熱帯性のバンレイシと暖温帯性のチェリモヤを交配して作られた亜熱帯性気候に適する植物です。強い甘さ、南国らしい芳香と柔らかい食感から「カスタードアップル」や「森のアイスクリーム」とも呼ばれています。また、パッションフルーツやマンゴーと重ならない冬場に収穫できるため、小笠原諸島の新しい特産品として有望です。

2. 亜熱帯農業センターの取り組み

農業センターではこれまで「ピンクスマンモス」の小笠原における栽培特性について研究してきました。人工受粉 50 日後までに収穫果の 70% 程度まで肥大し、その後生育が鈍化、収穫前約 30 日間で再肥大し、平均 132 日で収穫期を迎えます。25℃条件下で 5 日間の追熟が適すことも分かりました。

また、剪定による開花および結実期の調節が可能であることを明らかにしました。

慣行の 3 月剪定では収穫期は 10 月となりますが、夏期（6～8 月）に再剪定を行うことで収穫期を 11 月～4 月に調整できます。また、この処理により裂果の多い



写真：収穫期のアテモヤ果実

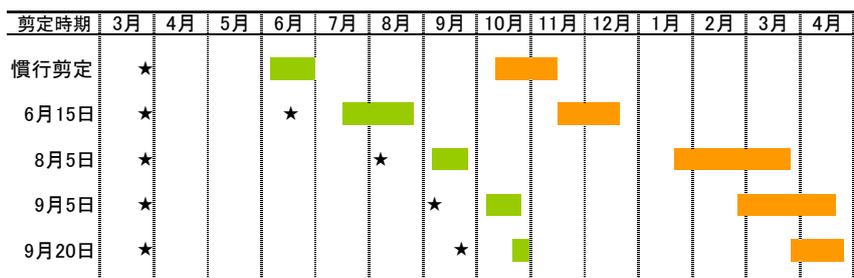
10 月収穫を回避できることも大きなメリットです。

3. 導入にあたっての注意点

- ① 農業センターでは施設内で栽培していますが、島内でも露地栽培で結実が見られることから、必ずしもハウスが必要ではないと考えられます(ただし父島ではコウモリの対策が必要)。また、ある程度の大きさの苗を購入すれば定植 2 年目から収穫可能です。
- ② 硬いうちに収穫し、室内で追熟させる追熟型の果実です。追熟後は輸送性が悪いため、輸送方法の確立や島内販売(加工など)の工夫が必要です。
- ③ アテモヤは虫媒花(主な媒介者は甲虫類)で、人工受粉により結実率と正常果率が向上します。作業は、比較的容易ですが、適時間帯は夕方から翌朝にかけてです。

④ カイガラムシ、ハダニ類などの発生がみられます。登録薬剤が少ないため、発生初期の捕殺や通風の確保など耕種的防除を心がけましょう。

導入にあたりご不明な点は、農業センターへご相談ください。 <網野>



★：剪定時期 ■：開花盛期 ■：収穫時期

図 1 剪定時期による開花盛期および収穫期の移動

～ 次世代育成に貢献できる

農業センターを目指して ～

農業センターでは、島内の農業者や一般の方々に向けた様々な取り組みを行っています。ここでは、体験学習への対応と、農業者セミナーについてご紹介します。

1. 体験学習への対応

子供たちに小笠原の農業を知ってもらうために、学校や保育園の体験学習に協力しています。11月27日には、小笠原高校の授業の一環として、1年生9人が来所しました。小笠原の農業やセンターの事業について講義で理解を深めたのち、ジャガイモの定植前準備、土作りなどの農作業を行いました。

父島保育園が行っているジャガイモの定植・収穫体験は、毎年恒例のイベントとなっています。今年度は12月5日に園児たちの手で種芋を植え付けました。収穫は3月上旬に行う予定です。

このほかにも、修学旅行で来島する町田総合高校の職場体験プログラムへの協力も行っています。

2. 農業者セミナーの開講

認定農業者・認定就農者を中心とした意欲的な農業者を対象に、技術向上のための農業者セミナーを開講しています。回ごとに様々なテーマを取り上げ、講師はそれぞれの分野を担当する職員や、母島の営農研修所所長、畜産指導所所長が務めます。今年度は以下のような内容で開講しています。

表 平成24年度の農業者セミナー開講内容

第1回	マンゴーの剪定	(渋谷)	8月10日
第2回	冬野菜の栽培	(網野)	9月20日
第3回	農業経営	(営農研・藤本)	10月24日
第4回	かんきつの剪定	(窪田)	11月20日
第5回	自生植物の増殖	(宗)	12月7日
第6回	畜産と堆肥	(畜指・吉田)	1月22日
第7回	病害虫管理	(大林)	2月28日

セミナーは、座学での講義だけでなく、圃場での実演・実習や、参加者と講師との意見交換を交えた形式で行うこともあります。

農業者セミナーの開催を通じて小笠原の農業の振興を進められるよう、取り組んでまいります。
<窪田>

～ ゴレンシのカイガラムシ類に使える薬剤が

登録(適用拡大)されました。～

小笠原は国内での生産量が少ない、いわゆる「マイナー作物」とされる作物の栽培が行われているため、発生した病害虫に使用できる農薬の種類が限られているのが現状です。そのような状況の中、少しずつではありますが、亜熱帯農業センターで適用拡大試験を実施し、パッションフルーツやマンゴーで使用できる農薬を増やしてまいりました。

2012年9月12日付けで、ゴレンシのカイガラムシ類に対して、「モスピラン水溶

剤」と、「モスピラン顆粒水溶剤」が登録(適用拡大)されました。

ゴレンシでの登録内容は、いずれの薬剤も「希釈倍数：4000倍、使用時期：収穫21日前まで、本剤の使用回数：3回以内、散布液量：200～700 l/10a、総使用回数：3回以内」です。なお、本剤はすでにマンゴーのカイガラムシ類とアザミウマ類、パッションフルーツのカイガラムシ類に対して登録されています。
<大林>